不定詞に於ける‘to’の出没について

四　方　田　敏

〔1〕 始　め　に

Fries の「American English Grammar, p. 130」によると，古代英語では to つき不定詞と原形不定詞の使用比率は原形不定詞のそれが約75%であるに反して，to つき不定詞の使用率は約25%に過ぎなかったと述べられている。これは言うまでもなく，古代英語に於いては不定詞は ～an の語尾を持つ動詞的名詞の性格が顕著であって，主語にも補語にも，又目的語にも自在に原形不定詞が使用できたことによるのである。そして to つき不定詞が用いられる場合には，例えば，þā on þone þriddan dæg, þā hie þā dūne gē-sawon þær hie tō scoldon tō of-sleanne Isaac. (The Old Testament, Genesis) (on the third day, when he saw the hill where he should go to kill Isaac), や又，“Gadriaþ ærest þone coccel, and bindaþ sceāfmæium tō for-bærnenne.” (The New Testament, St. Matthew, XIII. 30) (Gather ye together first the tares and bind them in bundles to burn them) の様に明確に目的を表わす意識の場合には to つき不定詞が使用されていたのである。

しかし，中世英語期に入ると，Chaucer (1340?—1400) の「The Canterbury Tales」を見ても明らかな様に，to つき不定詞が，かなり多用されているのが分かるのである。例示しよう。

God bad (=bade) us for to wax and multiply. it is fair to have a wyf (=wife) in pees. (=peace)

Us thoughte it was noght worth to make it wys. (We thought it was not worth deliberating.)

Strong was the wyn and wel to drynke us leste. (The wine was strong and we were pleased to drink) But, sooth to seyn, I noot how men hym call. (But, to tell the truth, I do not know how men call him.)

Whoso suffreth his wyf to go seken halwes is worthy to been hanged on the galwes! (A man who suffers his wife to go seek shrines is worthy to be hanged upon the gallows.)

次の例文では suffer が原形不定詞を伴なっている。

Thanne (=Then) wolde (=would) I suffre (=suffer) hym (=him) do his nycetee (=folly). begin についても用法に同様な動揺が見られる。The folk gan (=began) laughen (laugh) at his fantasye. (=fantasy) A Kynight ther was that fro the tyme that he first bigan to riden out, he loved chivalrie. (There was a Knight who from the day on which he first began to ride out loved chivalry.)

前の例では，beginの次が原形不定詞であり，後の文では to つき不定詞になっている。この様に変動も見られるが，「The Canterbury Tales」に見られる限り，to つき不定詞がその勢力を大幅に伸ばしてきたことはたしかである。

更に，これが Shakespeare (1564—1616) の英語に至ると，この現象はなほ一層顕著になるのである。勿論 Shakespeare にあってもこの二つの形の不定詞には或る程度の浮動性があるのは事実である。例えば「The Merchant of Venice」では I had rather to be married to a death's head with a bone in his mouth. の様に had rather to be... と to つき不定詞になっているのであるが，「The Merry Wives of Windsor」では I had rather be set quick i'th earth. の様に原形不定詞が用いられている。更に又 I were better to be married of him than of another. (As you Like it) の様な例もあれば，又 She

were better love a dream. (Twelfth Night) の様に原形不定詞を用いた文もある。この外,「Everyman's Library」の「Shorter Novels'. Elizabethan」でエリザベス朝時代 (1558—1603) の小説について見ると，その中には次の様な文が見出される。感覚動詞 see については the Knight casting his eye upon her, seeing her to gaze so wistly in his face, said thus to her. の様に see が目的語のあとに to つき不定詞を従えているが，又 would it not grieve a woman to see him forsake her, despise and contemne (=contemn) her? の様に原形不定詞の用法もある。又，you neede not bee (=be) any thing abashed or blush at the matter. の様な文もあれば又，Therefore you neede (=need) not to fear の様に助動詞用法の need not に to つき不定詞が続いている文も見られる。又. 使役動詞 make は the Scrivener made the bill to be paid. This made them all to laugh. の様に to つき不定詞を伴う用法が数例見出される。又同じ使役動詞 have についても， We would have you to remove the shooes (=shoes) of our horses feete. (=horses' feet) の様な to つき不定詞を従える用法も見られる。しかし Shakespeare[1] には I would have him help to waste his borrow'd purse. の様な原形不定詞の来る用法もある。

この様にこの時期の英語には多少の混乱がみられるが， Trnka[2] の説く所の「15世紀の終りまでは不定詞の前の前置詞の用いかたは非常に動揺があるが，16世紀と17世紀のあいだに次第におちつくようになった」という論述は正当なものと言い得るであろう。

次に to つき不定詞が次第に勢力を拡張して，原形不定詞を圧倒して行った理由について少しく考えてみることにする。

比較文法の示すところでは先史時代の不定詞は完全な屈折形を持つ verbal substantive であったと言われる。OE ではその語尾は bindan, (=bind) hieran (=hear), writan (=write) の様に ～an であった。そしてその唯一の屈折形は前置詞を伴った to bindenne, to hierenne, to writenne の様な ～enne の語尾を持つ与格であった。しかし，ここに一つの音韻変化が起ったのである。

Henry Sweet[2] によれば，中世英語では stress のない音節で母音が e に水平化される現象が生じ，このため bindan, hieran, writan は binden, hieren, writen ととなった。一方，to-infinitive に於いては，二重子音が単音化されて to bindenne が to bindene の様になり，更に弱音節の後では語尾の e も落されて to bindene が to binden となって to のつかない不定詞と形が同じになったのである。そして時が経つにつれて，最後の n も落ちて binde, write の様になり，一人称単数現在と形が全く同一になるに至った。そのため定動詞形と区別するためには，to が必要になり，to つき不定詞が一層，明確な不定詞として，原形不定詞に取って代って用いられる様になったのである。

ちなみに Onions[3] が近代英語の原形不定詞と to つき不定詞を用いた文，すなわち I will write soon. と The child began to write. の二文について，syntax の見地から歴史的に遡って明快に説明している。例えば，原形不定詞の write は OE writan の後裔であり，to write は OE to writenne (or writanne) の後裔である。前者の writan は，動詞語幹に接尾辞 ～an を付加してできた名詞の主格及び対格形であり，～an は意味上動名詞の ～ing に相当する。後者の writenne; writanne は同じ名詞の与格であり，つねにそれを支配する前置詞 to とともに用いられた。したがって writan は writing の意味であり，to writanne は to (or for) writing, および時としては in writing の意味であったと解釈している。つまるところ I will write の元の素性は I will writing であって，この場合の will は動詞で "欲する"，とか "志す" という意味であったと言うことができると思われる。

他方，Jespersen[4] は歴史上の発展の上からみて，to のつかない不定詞の使用が減少して行ったことを名詞だけの使用が同じ様に減少して行ったことと関連させて見ているのは興味深い。すなわち名詞には習慣的に不定冠詞や定冠詞がつくのと同じ様に不定詞が大古から原形不定詞を要求している語と密切な関係をなしていない時には一種の "動詞の冠詞" とも言うべき "to" を前置しなければならないという意味のことを述べている。そして次のような対照的な例文を示してい

る。

A walk with her is a great pleasure.

The walk with her was a great pleasure.

To walk with her is a great pleasure.

I should like a walk with her.

I should like to walk with her. etc.

その外，to つき不定詞が隆盛になった外的原因として Trnka[5] は中世英語期になって to 不定詞がさかんになったのは Old Norse の影響によると指摘している。つまり Old Norse においては，前置詞を伴う不定詞が規則的に用いられていたのである。

又 Jespersen[6] は to つき不定詞がロマンス語起源 (Romanic Origin) の動詞のあとで，(he *desires* to go, *refuses* to go, *causes* her to go) 如何にしばしば起るかということに注目して "to" の大いなる伸展はフランス語（そしてラテン語）がおびただしい数で英語に侵入した時期に生じたと興味ある所見を述べている。

この小論文では，表題の示す如く，toつき不定詞と原形不定詞の出没の様相を中心にして考察して行くのであるが，先づ，英語以外の主要な言語に於ける不定詞の実態について少しく触れて見たいと思う。

〔2〕 英語以外の言語に於ける不定詞

英語と同じくゲルマン語系に属するドイツ語について見てゆくことにしょう。

ドイツ語の原形不定詞は名詞的性質を持っていて文の主語となり得るという点に於いては近代の英語ほど窮屈ではない様である。

Fleßig *studieren* schützt vor Lang-weile (=To study diligently keeps one from boredom).

Ein Vergnügen *erwarten*, ist auch Vergnügen. (=To expect pleasure is also a pleasure)

Für mich ist *leben, dich lieben* (For me to live is to love you.)

又 zu を伴う不定詞の主語用法も無論ある。

Eine fremde Sprache zu sprechen ist schwer. (=To speak a foreign language is hard.)

又英語の形式主語 it による構文と同様に es を先行主語とする Es ist nicht nötig, viel Geld mitzunehemen. (=It is not necessary to take much money along.) の様な構文も見られる。しかし三好助三郎氏[7]によると，ドイツ語の原形不定詞を主語とする構文は16世紀頃までの古い用法で今日では格言めいた表現にだけ用いられるのであって，一般的には zu を伴う不定詞が用いられると言われる。英語の場合にはもっと制約はきびしいものがあって，Better bend than break.（柳に風折れなし）とか Better leave it unsaid.（云はぬが花）の様な純然たる諺にその跡をとどめている点に相違があると言ってよいであろう。

次にロマンス語系のフランス語について見てみよう。フランス語の原形不定詞はその名詞的性質を明瞭に持っていて，英語やドイツ語に比して文の主語としての用法はより自由であると言えるようである。*Marcher* etait difficile autant que penible. (To walk was difficult as well as laborious.) Il vaut mieux ne rien *dire*. (It is better to say nothing)

しかしフランス語にも前置詞 de を伴う不定詞の用法もある。Il est honteux *de mentir*. (It is shameful to lie.)

しかしフランス語が英語やドイツ語に対して特色をなしていると言える点はフランス語は目的語となる場合も de つき不定詞と又 de のつかない不定詞とが来ることができるということ，又副詞用法の不定詞の場合にも de つきと，de のつかない不定詞の両形があるということに見られる。目的語の場合としては Je veux *faire* cela (I want to do it) の様な原形不定詞の用法があり，副詞用法としては Il est sorti se *promener* (He is gone out to walk.) の様に書けるのである。

最後にスラブ語系のロシア語についてみると，この言語の不定詞は，英語はも

ちろん今まで述べた独語，仏語に比べていちぢるしい特徴を表わしている。ロシア語には英語の to. ドイツ語の zu, 又フランス語の de にあたる様な前置詞を伴う不定詞は存在しないのである。そして原形不定詞が，自由自在に，主語，補語，目的語又副詞用法に使用されるのである。Веру переменить не рубаху сменить (To change belief is not to change a shirt.) Сколько у него денег? трудно сказать. (How much money has he? It is difficult to tell.) Нечего делать. (There is nothing to be done) я хочу написать письмо (I want to write a letter) (下線の語が原形不定詞である)

以上は独，仏，露語の原形不定詞の名詞用法に主眼点を置いて略述してきたのであるが，次の〔3〕では英語の原形不定詞の名詞的性格について探ってみることにする。

〔3〕 英語の原形不定詞の名詞用法

(a) 既述の如く，古代英語に於いては不定詞は名詞的性格が強かったのでそれが主語として用いられることは決して珍らしいことではなかった。例えば lufigean his nehstan swa hine sylfne þæt is mare eallum onsægdnyssum and offrungum. —OE. Gosp, Mark, 12.33. (to love his neighbor as himself, is more than all whole burnt offerings and sacrifices.) の様な文がある。しかし，F. Th Visser[8] は「初期の古代英語には原形不定詞の主語用法の例は少しも見られず，後期古代英語に若干現われる。むしろ中世英語にその例が多い」と述べて At Mantsarran bide is my hole plesaunce. (live at Montsarran is all my pleasure.) Comendable is counceille taken of the wise. (Take council of wise people is commendable) を初めとしてその他の多くの例文を示している。筆者が中世英語に発見した例は Chaucer の「The Canterbury Tales」にある次の二例である。すなわち，

hym was *levere* have twenty books, clad in black or reed, of Aristotle and his philosophie than robes riche. (it was preferable to him to have

twenty books in red and black, of Aristotle's philosophy than fine clothes.)

It is good a man *been* at his large. (It's good for a man to be free and easy)

後の文の場合の a man been は a man (与格)+been (原形不定詞 be) の構造で現代では a man の前に for が置かれるところであろう。

そして16世紀になると Shakespeare の作「King John」には And have[9] is have, however men do catch. の様に原形不定詞 have を主語と補語に用いた用法がある。しかし又「As you Like it」には Then, learn this of me, To have is to have の様に今度は to つき不定詞を用いた文が見られる。更に「Romeo and Juliet」には To move is to stir, and to be valiant is to stand. の様な文もある。又シェイクスピア以外のエリザベス朝作家にも原形不定詞を主語に用いた文が見られる。Stab, poyson (=poison) or shoote (=shoot) him through with a pistol all is one, into the vault he shalbe (=shall be) throwen (=thrown) when the deed is doone. (=done) (Thomas Nashe, The Unfortunate Traveller)

上記のシェイクスピアからの例文を見ても分かる様に，シェイクスピアが to つき不定詞の主語用法を意識しつつあることが，およそ推察されるのである。

又前に引用した O.E の Gospel の文中の主語に当る部分 Lufigean his nehstan が "Authorized Version" (1611年) では To love his neighbor と to つき不定詞で訳されているところを見ると，17 世紀の初期迄には主語としての to つき不定詞の用法が standard English に於いて確立されていたと言うことができると思われる。

現代英語ではこの原形不定詞の主語用法（つまり名詞用法でもある）はほとんど廃用になっていると言い得るであろう。しかしこれは standard English について言えることであって，アイルランドに於ける方言の英語にはこの用法が存続していると言われる。谷口次郎氏[10] はこの用法はアイルランド英語には時々み

られると述べられ，その著書には，Believe me it is best leave the gold where it is. の様な例文が示されてある。

しかし，上記の Irish English 以外の現代英語に於いても原形不定詞の名詞性への意識が皆無であるとは言えないのである。珍らしい例であるが，小川三郎「不定詞，英文法シリーズ，p. 7」には Jack London からの引用例，But it was all he could, hold its (=the dog's) body encircled in his arms and sit there. が示されている。これは明らかに前方の it が原形不定詞 hold 以下を受けている，つまり原形不定詞の主語用法と言ってよいものである。又筆者は，Margaret Mitchell の「Gone with the Wind」に次の様な文があるのに気がついた。

Tomorrow there would be so many things to do. Go to Twelve Oaks and the Macintosh place and see if anything was left in the deserted gardens, go to the river swamps and beat them for straying hogs and chickens, go to Jonesboro and Lovejoy with Ellen's jewellery.

この文で原形不定詞 (go, や see) で表現されているところの，つまり，トウェルヴ・オークス農場とマッキニトッシュ農場へ行って荒らされた廃園に何か残っているかどうか見てこよう。それから川岸の沼地へ行って迷子になっている豚や鶏をみつけよう。...etc. は前の文の so many things to do の内容を表わしているとみなしてもおかしくはないであろう。そうすると，これらの原形不定詞には名詞的性格が潜在していると考えることができるのである。更に同じ小説に次の様な文章が見られる。

There's so much I'll have to do. See the undertaker and arrange the funeral and see the house is clean and be here to talk to people who'll cry on my neck. Ashley can't do those things, Pitty and India can't do them. I've got to do them.

この文に於ける原形不定詞で述べられている葬儀屋に**会ったり**，葬式の**用意をしたり**，家を**掃除させたり**などはすべて，後の文に於ける those things が受け

ていることが明らかである。そうすると，これら原形不定詞，see，arrange，be は明らかな名詞的意識でとらえられていると言うことは否定できないのである。この例文ではこの意識がかなり具体性を帯びていると言うことができる。

マーガレット・ミッチェルの「Gone with the Wind」には直截的で，こだわりのない，vivid な表現がところどころに見られるのである。例えば次の様な文章も見られる。

Such a breathless week when something within her drove Scarlett with mingled pain and pleasure to pack and cram every minute with incidents to remember after he was gone, happenings which she could examine at leisure in the long months ahead, extracting every morsel of comfort from them—*dance*, *sing*, *laugh*, *fetch* and *carry* for Ashley, *anticipate* his wants, *smile* when he smiles, *be silent* when he talks, *follow* him with your eyes so that each line of his erect body, each lift of his eyebrows, each quirk of his mouth, will be indelibly printed on your mind.

この文のイタリックで示されてある dance, sing, laugh, fetch....etc. はすべて原形不定詞用法になっていて，その息つくまもないように速やかに過ぎ去って行った一週間に起きたさまざまな happenings の内容と同格になっている。一種の名詞性を持った用法であると言ってよい。しかもこの原形不定詞はあっと言う間もなく飛び去って行った一週間の出来事のあっけなさを鮮明に描き出す effect を持っていると言うことができるのである。

(b) All you do is＋原形不定詞[11]の構造

ここに於いて上記の如く原形不定詞が補語になる構造について若干考察することにする。この構造はアメリカ英語に多用されていることは誰れしも知るところであるが，決してアメリカ語法に固有のものではなくイギリス英語にも現われる。イギリス英語の用例を示すと，

The least they'll do is send me away from Vienna. (Graham Green, The Third Man)

All one could do was try to make the future less hard. (id, The Quiet American)

Now all you got to do is let your hair grow. (Herbert, E. Bates, The Triple Echo)

次に最も up-to-date なものとして「The Listener」からの数例を示して見よう。

If you don't believe me, all you have to do is hop on an aeroplane, pop over to Paris and buy one of them. (=the books) (31. Jan, '74)

What I should like to do is write different kinds of poem that might be by different people. (17. Aug, '72)

Now, what we want you to do is tell us what you think his profession was. (10. Jan, '74)

「The Listener」にはこの構造はかなりの程度現われるのであって，最近の英語にあってはこの構造については英米の間に水平化が行われつつあると言ってもよいかと思われる。

とりわけ，矢張り「The Listener」に書かれていた What the government will have to do is not so much intervene in these conflicts, as elaborate a new concept which is more or less independent of growth (31. Jan, '74) の様な文章を見るとイギリス英語にもこの種の構造を自由に用いる傾向のあることが分るのである。

さて，次にアメリカ英語に於けるこの種の構造についての用例を示してみよう。

"All we do is wait, wait!" (Richard Wright, Uncle Tom's Children)

見られる通り原形不定詞 wait が二度くり返され，しかも「!」符号を伴っている。いかにも直截で，活々とした口語表現になっていることが感じられる。更に同じ作家の同じ作品に次の様な文も見られる。

"All you ever do is play around with Reds, don't you?"

"All you ever do is get crowds of niggers together to threaten white folks, don't you?"

言う迄もなく「話し言葉」のいかにも生々とした感じが表わされている。付加疑問のついていることがよくその性質を示している。又 All I did was sort of land on my side. (Salinger, The Catcher in the Rye)

これは副詞の sort of が原形不定詞 land on my side (横腹を下にして倒れる) を修飾しているもので，あざやかに口語性を表わしていると云える。

Salinger の「The Catcher in the Rye」には問題の構造が多く見られ，しかもこの種の構造の「標準型」に他の表現をプラスして自由に用いているのが目につく。例示すると，

All you have to do, practically, is sit down on the bed and say, 'Wake up, Phobe'.

ここでは practically が挿入されている。

All they did with the guys that were in the room with him was expel them.

ここでは all they did 以下の主部の部分が非常に長たらしくなっている。

All I ever saw him do was booze all the time and listen to every single goddam mystery programme on the radio. And run around the goddam house, naked.

ここでは最後の原形不定詞の補語の部分が前の文とピリオドで断絶した形になり，あらたに and によって導かれている。このような書き方からすれば，この場合の原形不定 run の名詞的性格は一段と顕著なものとして現われてくると言える。

Hemingway の「A Farewell to Arms」には同じ場面に to つき不定詞と原形不定詞の二種類の構造が相前後して現われるのが見られる。

All I had to do was to get to Pordenone with three ambulances. I had

failed at that. All I had to do now was get to Pordenone.

始めの文では to get と to つき不定詞になっているが，後の文では get と原形不定詞になっている。後の文では「今となってはポルデノーネへ行きつくことだけに「I」の気持が集中していると言える。前の文に比べると，その意味では主情的になっている様に思われる。

さて，今迄に示された例文によっても判るように，問題の構文に於いては主部にすべて動詞 do があり，この do 存在がこの種の構造の必須条件の様に思われるのであるが，必ずしもそうとは限らないことは次の様な例があることによって証明される。

(1) All she wants is go back to old country to see the graves of our parents. (Dos Passos, Midcentury.)

(2) All he knows how to say is throw benches. (Hemingway, A Farewell to Arms)

(3) What I want to know is keep on moving so that I won't take root in any one place. (小栗敬三，実践英文法シリーズ，文章篇（上）p. 50)

これらの類型が現われたのはおそらく do を持つ問題の構文からの類推によったものであること，それから問題の構文の補語である原形不定詞の名詞としての意識が定着したこと，これら二つの理由などがあるように思われるのである。

さて，ここで問題の構文のそもそもの発生について考察を加えてみたいと思う。この構文の発生の動機と考えられるものとして，Shakespeare の英語に見える If he love Caesar, all that he can do is to himself; take thought, and dye for Caesar. (Julius Caesar) が注意さるべきである。見られる通りこの文は問題の構文と非常に類似している。ただ補語に当る部分が「;」で切断されて居り，しかも，その部分，すなわち take... 以下が明らかに命令形をなしているのが認められる。又 Faulkner の「Requiem for a Nun」にも次のような文が見出される。

(1) All you have got to do is, refuse to accept.

(2) The only thing you can do is, bury them both quick.

(3) All she had to do was, do the one thing which she knew they would forbid her to do if they had the chance.

以上の諸例を見ても分かる様にここでは問題の構文が補語である原形不定詞の前にコンマを置く形式をとっている。この点から見てこれら例文の原形不定詞は命令形の存在を連想させずには置かないのである。更に又次のような文も「The Listener」に見出される。

We are going to show you three X-rays of some organs of a famous politician. What we want you to do is 'Spot the Minister'. (10. Jan, '74)

この文に於いては 'Spot the Minister'（この大臣を見分けなさい）は引用符号にかこまれていて命令文出身の「引用実詞」であることは明瞭である。

今この引用符号を取り除いてみれば，問題の構文に全く合致することは容易に分かる。前述の Faulkner からの引用例やこの「The Listener」の例文から判断すると問題の構文を発生させた発想の原点に命令文の存在が見えてくるのである。そして Curme[12] が「口語に多用される All she has to do is come here. のような場合」の原形不定詞について「命令文と解することはできない」と述べている所説には必ずしも同意し難いのである。

又，安藤貞雄教授[13]が問題の構文の類似構文として The only advice I feel competent is, keep it as simple as you can. 等の例文を示されて，この Bare Infinitive は引用された命令文つまり引用実詞と見るべきもので問題の構文とは峻別されなければならないと説き，又この例文のように「コンマによって主部との "断絶" が行われている点にも注目すべきであって，このような断絶は，問題の構文では見られないものである」と説いて居られるが，このような考え方にも賛成し難いのである。安藤教授が「この構文の成立する不可欠の要因とみなす」doを含む問題の構文に前述の Faulkner にあるようなコンマの存在する構文が見出されるからである。

〔4〕 その他の用法

After breakfast I helped her wash the crockery. (Dos Passos) の様に help が原形不定詞を従える構文がアメリカ英語に頻用されていることは周知の事であるが，the Evanses[14] は help が to つき不定詞をとる構文はアメリカではほとんど聞かない。ただ，help が to つき不定詞をとるのは we were helped to get out. の様な受身の場合に一般的であると述べている。

しかし，helpが原形不定詞をとる構文はイギリス英語でも用いられているのであり，例えば

I helped Harry fix the papers. (Green, The Third Man) や It's up to us, as fellows-members of the European Community, to help her use it with us. (The Listener) の様な文が見出される。

F.T. Wood[15] も help が原形不定詞を従える構文はかっては Americanism と非難されたが，今ではイギリスでも容認されている。しかし，いつも to が省かれる訳にはゆかないのであって These tablets will help you sleep と言うことはできない。to を省いてよいのは We help him mend his bicycle. とか We help him lift a box の様に helper である我々が我々から助力を受ける he と共同して，heの仕事のいくらかの部分をしてやる。つまり彼の仕事に我々が参与するという場合に限られる。しかし tablets は我々が“眠る”ことに参与しないからであると言う意味のことを述べているのは興味がある。

ところでこの help が原形不定詞を従える構文について，C.T. Onions[16] はそれは hear, feel など規則的構文に助長されたものであると論じている。他方 Jespersen は help を make 等の使役動詞と同じカテゴリーに入れて扱っている。help も make と同じ様に，「助けて～させる」という使役的意味が含まれていると見るべきであって，これからして make が原形不定詞を従える構造からの類推によって問題の help の構造が助長されたと見る方がより合理的で説得力があるように思えるのである。

ところで問題の構造に於いて help が受動態になると規則的に to つき不定詞を従えることになる。これは see, hear の様な知覚動詞や make の様な使役動詞についても言えることであるが，その理由について考えてみよう。能動態 I helped him do that. の様な場合 him と do that の結合が強固で him do that が一つのまとまりをなして help の目的語になっていると感ぜられる。しかし，これが受動態 He was helped …… となると，明らかに him と do that とが分断され，help+him do that, すなわち，help+目的語の連結がこわれてしまったために help は to つき不定詞 to do that を必然的に伴なう様な言語意識が作用したものと思われる。しかし，同じ使役動詞でも let の場合は事情が異なっている。make のように能動態では let me go のように原形不定詞をとるのであるが，受動態の場合でも the grass was let grow, I was let know のように決して to つき不定詞をとることのないという点は注意さるべきであろう。しかしながら the Evanses[17] がこのような let の受身形は一般に避けられて，他の語を用いた the grass was allowed to grow や I was informed の様な言い方をするという意味のことを述べているのは有用な所見である。

外に原形不定詞を伴う表現として，make believe という連語がある。これは元来，フランス語の faire croire にならって出来た言い方であって，主に that～clause を従えて to cause people to believe that～ という意味であったが，現代の用法では to つき不定詞を伴えば to pretend to do something という意味になり，又 that～clause を伴えば to stimulate a belief を表わすと Oxford English Dictionary には説かれている。又 that～clause を伴った場合は遊んでいる子供について言われることがしばしばで to subject oneself voluntarily to the illusion という意味になると言われる。これについての用例を示しているのはアメリカの辞書では The Random House Dictionary だけで The little girl dressed in her mother's old evening gown and made believe she was Cinderella at the ball. という例文が出ている。現代のアメリカ語法では believe の目的語として原形不定詞をとる場合があるのであって Jespersen もアメリ

カの Sinclair Lewis と Cooley からの二例, I make believe read my French books. I have seen her sit down and make believe cry. を例示している。イギリスでは He made believe not to hear me. の様に to つき不定詞が来るのが普通である。ちなみにこの make believe の形は make の目的語である people が「分っている」ものとして, 落ちたものである。

又次の様な場合には原形不定詞が来るのが普通であると言ってよいと思われる。いづれも What で始まる疑問文の形をとっている。

(1) What are you trying to do, blame it on me! (Arthur Miller, Death of a Salesman)

(2) What is this supposed to do, make a hero out of you? (ibid)

(3) What are you trying to do—separate us? (Eugene O'neill, All God's Children Got Wings.)

これら三つの例を見ても分かる様に, いづれも do が先行している。この do の影響で blame it on me (それを私のせいにする) とか separate us (吾々を引き離す) とかの原形不定詞の形をとっていると思われる。

do の影響と言えば次の様な場合もある。

(1) There was nothing for me to do but to say I'd be there at eight o'clock tomorrow morning. (Dos Passos, Midcentury)

(2) Nothing to do but take him to court. (ibid)

(3) There had been nothing for him to do but go down to work in a rubber shop in Gadsden. (ibid)

例文の(1)だけが to say という to つき不定詞になっている。同じ作家でも不定詞の両形を用いているのであって, 必ずしも一定していないのである。又Willa Cather の「A Lost Lady」には he must have decided that there was nothing for him to do but to keep out. の文があって but の後に to つき不定詞が使われている。従ってこの種の構文に於いては do の影響は決定的なものではないと言ってもよいかと思われる。

but と同類の except については I have done nothing except send for the constable. (Jespersen) の例文があって，矢張り do が先行していて send と原形不定詞が来ているものと思われる。しかし，同じ Jespersen にも do が先行しているが One can do nothing—except to make light of the incident. の例文も出ている。しかし do が先行しない場合には to つき不定詞がくると言ってよいのは次の例文を見れば分かる。

(1) I didn't have any goddam choice except to leave. (Salinger, The Catcher in the Rye)

(2) My grandmother hardly ever even goes out of the house, except, maybe, to go to a goddam matinee or something. (ibid)

(3) Nobody had ever told them anything except to get more and do less. (Dos Passos, Midcentury)

Jespersen[18] は to を使用するか使用しないかについて，以下のやうな疑問を提出した時

(a) You might do worse than (to) accept his offer.

(b) I can not do better than (to) give in.

(c) I expect to weep as much as (to) laugh.

(d) I expect to weep no less than (to) laugh.

これらについて Collinson 教授が答えた内容を伝えている。それによると(a)については Both correct; Omission of to slightly preferable. (b)については I should prefer to omit to here, but its insertion is not unnatural. (c)と(d)については Either with or without to possible. I have a feeling that the omission of to is commoner in (d) than in (c).

又 You ought to weep instead of (to) laugh. に関しては一この場合，もちろん instead of laughing となるのが自然であるが一必ずその場合には to を省くだろう。to が入るのは不自然の様に思えると述べている。

これを見ても分るように，矢張り(a)と(b)の文では do が先行しているのであっ

て，英語の native speaker としては than の次に to を省くことが自然に感じられるようである。又 instead of の次には原形不定詞がくるべきであって，toつき不定詞は unnatural と述べているのは instead of には in stead of という言い方もあって，二つの前置詞を含むこの形のあとで更に to つき不定詞の前置詞 to が重さなるのが clumsy な感じになるからではなかろうか。もっともこれは一種の feeling にも関することであって instead of の次にくる不定詞は先行の不定詞の形に平行すると Jespersen は書いている。Jespersen は次の様な例文を示している。すなわち

they had watched the stormy weather ebb away instead of gather force.

この文では先行の不定詞が ebb と原形不定詞になっているから instead of の後は gather と矢張り原形不定詞になっている。

又 a person who proposes to enrich the common fund instead of to spunge on it.

ここでは先行の不定詞が to enrich となっているから instead of の次は to つき不定詞 to spunge となっているのである。

さて，次にこれはもっぱらアメリカ語法に於ける不定詞の用法であるが，いくつかの気付いた点について述べてみたい。

先づ would rather＋to つき不定詞の構文が見られる。

She said, "I would rather to see them (＝the boys) than not to see them. (Flannery O'Connor, A Good Man is Hard to Find)

これは言う迄もなく今日では正用法ではないと思われる。

又 ought＋原形不定詞の形も見られる。

I think we ought rely on the doctor. (Arthur Miller, The Crucible)

Shakespeare の英語には you ought not walk (Julius Caesar) の様な言い方があるが，現代に於いてはこの用法は archaism と言うべきであろう。

又 Flannery O'Connor の「Wise Blood」には need not のあとに to つき不定詞が来る用法が時々現われる。

(1) You needn't to look at the sky because it's not going to open up and show no place behind it.

(2) You needn't to search for any hole in the ground to look through into somewhere else.

Shakespeare の英語では I need not to advise you further. (All's Well that Ends Well) の様な言い方もなされていたが，現今ではこれも standard でない archaism と言うべきであろう。

次に動詞の用法についてであるが，Arthur Miller の「The Crucible」には "You beg me to conjure. She beg me make charm." の様な文があり，beg の後に原形不定詞と to つき不定詞の両形をとっている。又同じ作品の中で Did he (=the Devil) bid you to do his work? の様な bid が to つき不定詞をとる文も見える。これも正用法とは言えぬものである。もっともアイルランド語法[19]では bid の後では原形不定詞と to つき不定詞の両形がくるのである。to つき不定詞を伴なうものとしては He bade me to go call him at the time the vote will be coming on. の様な文が見られるのである。

次にイギリス英語にないアメリカ英語の特色を示すものに say の用法がある。例示する。

(1) "The Bible says testify whut (what) youh (=you) see n (=and) speak whut you know. (Richard Wright, Uncle Tom's Children)

(2) Youh (=you) said believe in the blooda (=of) your son Jesus. (ibid)

(3) "Boy, I say give me that gun! (ibid)

(4) June Star said play something she could tap to. (Flannery O'Connor, A Good Man is Hard to Find)

上例によっても分る様に say の次に原形不定詞が直結している語法である。しかし，他方 to つき不定詞がつづく場合も無論ある。

(1) He said to pour it (=the water) on his shoulder. (Hemingway, A

Farewell to Arms)

(2) Kate had said to meet her at the Hotel Brevoort. (Dos Passos, Midcentury)

(3) Haw said to come alone. (ibid)

(4) She said not to look at her when she comes in. (Salinger, The Catcher in the Rye)

(5) Berenice had said to go do something. (Mccullers, The Member of the Wedding)

The Evanses[20] によれば he said to hurry という様な言い方は he said we should hurry. というつまり subjunctive clause の代りに今日のアメリカではしばしば用いられているのであって文法学者の中にはこの構造を悪く言う者もあるが，最高の教育を受けた人々の間でも聞かれるのであり，より好まれる言い方になるであろうと言われている。思うにこの様な語法は 口語性の明確なアメリカニズムと言うことができるであろう。

さらにこれらの構造に類似した用法がアイルランドの作家に認められるのである。

It's easy saying be wary. (Synge, The Thinker's Wedding) 軽々には断じ難いが，アメリカの英語のこの語法にはこの方面からの影響が考えられるのではなかろうか？

この様に見てくると，アメリカ語法には意外に“古風さ”と“方言的性格”が浮かび上ってくるように思えるのである。

さて，最後に若干の点を補足してこの論文を終えることにする。

先づ不定詞の独立の文に用いる用法と言われるものについて述べることにする。先ず用例を示すと，

(1) Oh, to have to sit here, a wallflower against her will and see Fanny or Maybelle lead the first reel as the belle of Atlanta! (Mitchell, Gone with the Wind)

(2) Oh, to have this happen when he was right at the point of a declaration! (ibid)

(3) She could imagine how Frank would moan when she broached such an idea to him. Take the jewellery and property of his friends! (ibid)

(4) How can you even suggest that he would do such a thing? Betray his own Confederacy by taking that vile oath and then betray his word to the Yankees. (ibid)

上例のすべてが，強い感情的表現を表わしている。(1)は舞踏会で踊り相手もなくいやいやながら座っていなければならない気持，(2)は愛の宣言の時に自分の醜い手を相手の男にみられてしまったときの嫌悪すべき気持，(3)は友人の財産を奪いとる。(4)は下劣な誓約をして南部の同盟側を裏切る行為　いづれも卑しむべき行為に対する反感の気持が表われている。この様な表現は「非難の不定詞」とも称すべきものであるが，上例の如く，toつき不定詞と原形不定詞の両様の形態がある。そして感情の色彩の程度にも特に相違があるとも思えぬのである。

この外次のような言い方に一言しておく。

(1) 'Well, I didn't mean go into a corner. (Mcullers, The Member of the Wedding)

(2) I mean take her to a hotel and treat her. (O'Connor, A Good Man is Hard to Find)

これらの例に於ける go や take は mean to go や mean to take の形とは無論異なる。例えば(1)の場合だったら「隠居しなさい」という気持で言ったのではない，という意味であって，go into a corner や，take her to hotel などはいわゆる命令文の「引用実詞」と言うべきものである。

〔5〕 終　り　に

近代英語に於いて to つき不定詞が原形不定詞を圧倒して行ったのは，特に主語，目的語，補語としての不定詞の用法に於いて前者が後者にとって代って行っ

たためであり，それが Fries[21] の調査では現代英語に於ける両者の使用比率が to つき不定詞82%に対し，原形不定詞18%という数字となって現われたのである。

この論文を論述するにあたって判ったことはイギリス英語に比べると，アメリカ英語には二つの形の不定詞の間にイギリス英語より多少，浮動性が見られると言うことである。Kirchner によればアメリカ英語には I'm going to try help see that they don't. という try が目的語に原形不定詞をとる用法があると言う。

又「現代英語学辞典，成美堂」によれば She has to be carfeul not get her skirt wet. というような副詞用法の不定詞に原形不定詞が用いられ，独立用法の不定詞に "to" のつかない，Tell you the truth, Evie, I've suspected that... の様な例も見えるとのことである。特に後者の形についてであるが，これは "Come to think of it," she said, "I have got an old fountain pen." (William Sansom, The Marmalade Bird) に於ける to のない come to think of it と類似した形に見える。現にこの形を不定詞と見ている学者[22]もいる。もっともこの言い方は Jespersen[23] によれば，If you come to think of it, 又は Now you come to think of it が prosiopesis (頭部省略) によって出来たもので，hark you, look you, mind you, Damn! Confound it! などと同じ様に発話の表現形式と言えるようである。しかしそれにしても上述の Tell you the truth の独立用法の形にしても，発話の際に "to" が発声されないで落されることもあり得ると思われる。いづれにしても口語的表現である様に思われる。それにしてもこれらの不定詞の用法が今後アメリカ英語でどのように進んで行くか興味深いことと言わねばならない。

注

(1) フランツ（斎藤静，その他訳）シェイクスピアの英語「不定詞」

(2) A New English Grammar, Part 1, p. 375.

(3) An Advanced English Syntax, 157.

(4) A Modern English Grammar, Part V, 10.2_4

(5) 動詞文章法史的概論（斎藤静訳）p. 141.

(6) A Modern English Grammar, Part V, 10.3_2 又 Jespersen は次の様に述べている。

Thus it will be seen that the to-infinitive, though far from being stiff, literary or remote from everyday life, nevertheless belongs to a somewhat more exalted sphere of the language than the more homely construction without the preposition.

(7) 独英比較文法, p. 220.

(8) An Historical Syntax of the English Language, (11) p. 948.

(9) Spenser の「Faerie Queene」には Die is my dew の例が見える。

(10) A Grammatical Analysis of Artistic Representation of Irish English, 「Infinitive」

(11) An Historical Syntax of the English Language (11) p. 972.

The origin of this idiom is obscure. It occurs only in very recent English. In all instances found so far the copula is preceded by a form of the verb *to do*, and it looks as if the occurrence of this form is determinative for the use of the plain infinitive.

(12) Syntax, p. 6.

(13) 英語語法研究（研究社） p. 15.

(14) A Dictionary of Contemporary American Usage, 「help」

(15) Current English Usage, 「help」

(16) An Advanced English Syntax, 165.

(17) A Dictionary of Contemporary American Usage, 「let」

(18) A Modern English Grammar, Part V, 10.3_7

(19) Taniguchi. A Grammatical Analysis of Artistic Representation of Irish English, p. 89.

(20) A Dictionary of Contemporary American Usage, 「say」

(21) American English Grammar, p. 131.

In the materials examined here, there are, in all, 1,085 instances of the infinitive, of which only 196 or 18 per cent are the simple infinitive, and 889 or 82 per cent the infinitive with 'to'.

(22) 江川泰一郎, 英文法解説 p. 285.

(23) A Modern English Grammar, Part III, 11.8_{73}, Part V, 16.1_2.